

ISSN 2186 – 3989

現代日本社会における「世間」へのアプローチ  
－近年の「世間」研究の動向を踏まえて－

板倉 栄一郎

Approach to "seken" in modern Japanese society  
－ Based on the recent trends of "seken" research －

Eiichiro Itakura

北 陸 大 学 紀 要  
第50号(2021年3月)抜刷

# 現代日本社会における「世間」へのアプローチ ー近年の「世間」研究の動向を踏まえてー

板倉 栄一郎\*

Approach to "seken" in modern Japanese society  
ーBased on the recent trends of “seken” researchー

Eiichiro Itakura\*

*Received October 16, 2020*

*Accepted December 24, 2020*

## Abstract

As a premise for considering "seken" in modern society, this paper first overviews the trends of recent "seken" research, and then overviews the "seken" while tracing the changes in post-war Japanese society. Is the main purpose. Since the Taisho era, the historian Kinya Abe's view that the traditional "seken" has been preserved as it is in an environment where the environment surrounding Japanese society has been forced to change both domestically and internationally is not appropriate. There is a sense of question as to whether or not there is.

The first chapter presents personal views on "seken" and "kuuki(mood)", mainly from the standpoint of psychology. And in Chapter 3, I would like to try to consider from the viewpoint of media, which had a great influence on the Japanese people after the war. In the next manuscript, I would like to inform you in advance that we will consider “seken” from the perspective of" structure. "

Key Words : “kuuki”(mood), tuning pressure, approval crisis  
improvement of life consciousness, maintaining standard of living

## はじめに

本稿は、戦後の日本社会と「世間」との関係について、近年、相次いで出版されている書籍等を抛り所に「世間」研究の動向を概観し、次いで戦後の日本社会の変化を辿りながら現代の「世間」の様相にアプローチすることを目的とする。

近年の「世間論」研究については、「付度」や「空気」、「同調圧力」を取り上げた著書が散見されるが、そのほとんどが歴史学者である阿部謹也の「世間論」を前提に論が進められている。阿部の「世間論」<sup>1</sup>は、従来の日本論や日本人論の再考を迫るものとして研究史上、重要な位置を占めるものであることは疑いがない。しかしながら、前稿でも指摘したように<sup>2</sup>、大正期以降、日本国民の生活環境が国内的にも国際的にも変化を強いられた中で、旧来の「(伝統的な)世間」がそのまま温存したという阿部の見解には妥当性があるのかという素朴な疑問が依然として残る。そこで、近年の「世間」を取り上げた論考や著書を整理すると、主に心理学とメディアの分野に大別できるので、主にこの2つの分野からのアプローチを試みる<sup>3</sup>。併せて、「IT社会」「格差社会」「監視社会」「不寛容社会」などの近年の日本社会の実態を表すキーワードは、概して閉塞感や息苦しさを意味しているが、そのことと「世間」がどのように関係するのかも考察したい。

次に、これらのことと関連して、戦後の日本社会を“変化”という視点で取り上げてみると、例えば、アメリカ民主主義の影響とそれに伴う若者文化の登場と変質、テレビの出現・浸透とそれが日本社会に与えた影響、大衆消費社会の出現や女性の社会進出など、幾つかの要素が挙げられ、それらのほとんどが日本人の生活の変化に多大な影響を及ぼしている。特に、ここ20年は、インターネットの出現や第二次産業から第三次産業への就業人口の移動などがあり、このような状況の中で「世間」を構成する人々の意識に変化は見られなかったのだろうか。また、変化が見られたとすれば、どのように変化したのだろうか。本稿では、日本人の意識の変化を考察することがそのまま阿部の「世間論」を考察することにも繋がると考えている。従って、前稿に続いて日本人の「生活意識(の向上)」と本稿で新たに用いる「生活水準の維持」をキーワードにして論を展開することにしたい。

翻って、戦後の「世間」を考察する際に、日本の社会構造にも触れる必要がある。文化人類学者の中根千枝が論じた「タテ社会」の理論は、日本の社会構造の特質を明快に示すものとして、学術的評価が高い。従って、「タテ社会」の理論は、戦後の「世間」を考察するに際して避けることのできない先行研究として位置付けられる。そこで、「タテ社会」と「世間」について、“構造”という観点からアプローチをすることも重要な作業であるが、この点に関しては、次稿で考察をする予定である。

さて、以上のような問題関心の下、第1章では主に心理学の立場から、第2章では「世間」と「世間体」について、第3章では戦後の日本人に多大な影響を及ぼしたテレビを取り上げて考察することで、現代の日本社会と「世間」との関係にアプローチしたい。

## 第1章 日本の現代社会と「世間」ー主に心理学の立場からー

### 第1節 「付度」と「世間論」について

森友学園をめぐる一連の騒動をきっかけに広まった「付度」という言葉について、精神科医の片田珠美は、その著書<sup>4</sup>で、「付度」は官僚の世界だけでなくあらゆる世界で起こり得るということを幾つかの事例を挙げて紹介している。そして、「嫌われたくない、波風を

立てたくない、怒らせたくないといった心理が働き、半ば無意識のうちに相手の顔色をうかがう。そして、相手が何を望んでいるのかを察知し、先回りして満たそうとする」といった自己防衛のために「忖度」をするとし、その胸中にはしばしば恐怖、罪悪感、承認欲求が潜んでいると記している<sup>5</sup>。ここで、やや話が逸れるが、片田による承認欲求に関する見解について紹介しておきたい。

片田によると、承認欲求の強い人は「他者の欲望」を満たすことを最優先するあまり、過剰適応になりやすく、過剰適応の人は「周囲に対する「対他配慮性」が人並み以上にあり、気配りができるので、周囲からの評価は高い」<sup>6</sup>としている。承認欲求については、現代の日本社会と「世間」との関係性を考察する上での重要な視点になると考えているので、先に紹介した次第である。

さて、本節で注目したいのが「同調圧力」である。片田は、「同調圧力」の原因は「排除」への恐怖であるとし、「排除」されないためには、みんなと同じようにするのが一番ということも、多くの日本人が子どものことから頭に刷り込まれている<sup>7</sup>、と記している。そして、「同調圧力」が強いところには、しばしば独特の「空気」が漂い、「同調圧力の強い日本社会では、この「空気」がわれわれを支配し、少なからぬ影響を及ぼしているからだろう」<sup>8</sup>と「同調圧力」と「空気」を関係づけて自説を展開している。尚、「空気」に関しては、山本七平の『空気の研究』を参考に展開しているが、これは氏だけでなく、「世間論」に関わる研究者や著者のほとんどが山本の著書を引用している。

このように、片田の著書では、「忖度」、「同調圧力」、「空気」の3つの語句が取り上げられており、現代社会は「むしろ「空気」の支配が強まっているとさえ感じる」と結論する片田が、その根拠として挙げているのが、阿部の「世間論」である。片田は、阿部の「世間論」から、①「世間」は社会とは違う、②排他的で差別的な性格があるので、内と外を区別する、を参考にして、そこから発生する問題点として「日本社会の少なからぬ部分がいまだにコネや人脈で動かされていて、それを支えているのが「世間」である」「自分が所属する「世間」のほうばかり向いていて、社会に目を向けようとしない」の2点を挙げている<sup>9</sup>。続けて、阿部が挙げた「世間」の3つのルールー i) 贈与・互酬の原則、ii) 長幼の序、iii) 共通の時間意識ーを紹介しながら、その3つのルールも崩れつつあると指摘しているが、その一方で、冒頭で取り上げた「忖度」が蔓延しているの見做しており、「世間」と「忖度」との間に矛盾を見出すのである。そして、この矛盾について片田は、作家・演出家の鴻上尚史の著書<sup>10</sup>を取り上げ、この矛盾を解き明かしたものと賞賛する。

鴻上の著書については、第3章で具体的に取り上げるので本節では簡単な紹介のみに留めておくが、端的に言い表すならば、「「世間」が流動化したものが「空気」<sup>11</sup>であり、現代の日本社会を「『世間』が壊れ『空気』が流行る時代」<sup>12</sup>と形容していることである。また、「世間」という“ちゃんとした”共同体が崩壊しつつあることだろうとしたうえで、「もはや「共同をもう一度取り戻すのは、不可能だ」と多くの日本人が感じており、せめて「共同体の匂い」を感じたいという願望が「空気」という言葉になるのだ」という鴻上の主張を引用し、これを肯定的に捉えている<sup>13</sup>。しかしながら、鴻上が主張する“ちゃんとした共同体”とは如何なるものなのかという疑問が残る。

## 第2節 「忖度」の構造と「世間体」について

心理学者の榎本博明も片田とほぼ同じ時期に「忖度」に関する著書を著している<sup>14</sup>。氏は「忖度」について、「忖度」そのものが悪いわけではなく、むしろ相手のことを配慮する心の構えとして、温かい人間関係の形成や維持のために重要な役割を担っている」<sup>15</sup>と、「忖度」の本質に一步踏み込んで論じている。榎本も、森友問題を端緒に日本社会のさま

ざまな場面で「付度」が表出したと述べており、さらに「付度」の正体を「空気」に求め、片田と同様、山本七平の著書を取り上げて自説を補強している。そして、日本的なコミュニケーションの特徴である「空気を読む」や「察する」に着目しながら、「私たち日本人は、何を言うにも、何を書くにも、相手や周囲の人の感情的反応を気にせずにはいられないのである」<sup>16</sup>と結論付けている。

注目すべきは、榎本の著書では「付度」の構造の背景にまで論が及んでいることである。氏は、それを子育てやしつけに求めており、西欧と日本との子育てやしつけを比較した心理学者の東洋の先行研究<sup>17</sup>に基づいて比較・分析しながら、「付度」に言及する。また、精神医学者の土居健郎のアメリカ研修での体験を引き合いに出し、「(アメリカ人の場合)、個の意識が強すぎると、感情の面でも他者から切り離されて生きるのが習慣化して育つため、他者の気持ちに対する共感性が鈍くなり、日本人の場合は、個の意識希薄であり、相手と溶け合うような心のあり方を大切にするため、共感力(筆者註、非難される「付度」や称賛される「思いやり」)が磨かれるのであろう」<sup>18</sup>と論じるが、このように、日本の伝統や文化を西欧のそれと比較しながら相対化し「付度」の善し悪しや発生要因について論じているという点では、傾聴すべき見解である。

さらに、「同調圧力」にも言及する。氏によると、最近の若者は群れる傾向があるということを前提としたうえで、「SNSの進化により、グループの同調圧力が一緒にいないときまで強烈に襲いかかってくるようになった」<sup>19</sup>と、同調圧力の原因の一端をインターネット社会に求め、最近、よく耳にする「SNS疲れ」を「付度疲れ」と同一のものと解釈する。要するに、IT社会の出現によって「同調圧力」が高まったと主張するのである。

そして最後に、近年の日本社会では、「察する力」や「思いやり」が低下ないし劣化しており、これは欧米流のコミュニケーション方法の普及や子どもの頃の遊び環境が変化したことに拠るものと指摘する<sup>20</sup>。ここまでは片田と同じ3つの語句に言及し、加えて、教育や子育て・しつけの伝統・文化の領域、現代社会の特徴を表すIT社会を取り上げるなど、幅広い分野や領域を取り込みながら自説を展開しているのが特徴である。

ここで、「世間」が日本社会の伝統的な特徴を表すという阿部の「世間論」の主張からすると、榎本が「世間」に対してどのような見解を持っているのかに興味が移る。氏は、本著では「世間」への具体的な言及はないが、2つの別著で「世間」に言及している<sup>21</sup>。しかしながら、それは厳密に言えば「世間」ではなく、「世間体」についてである。つまり、片田が自説の根拠として挙げたのが阿部の「世間論」であるのに対して、榎本のそれは阿部の「世間論」ではないのである。榎本が大々的に「世間体」について論じた各々の著書を要約すると、他人の視線(抽象的な他人の目)という切り口から「世間体」が論じられており<sup>22</sup>、現代社会では日本文化における重要な行動規範であった「世間体の原理」が時代とともに形骸化し、その理由を人間関係の変化に見出している。そして氏は、他人が遠い存在となってしまったために他人の目を気にしない傾向が強まっており、その理由として近所の遊び集団の崩壊によって目上・目下関係を経験することなく育つ時代になったからだ、<sup>23</sup>と主張する。また、なぜ日本人は「世間体」を気にするのかについて、和辻哲郎の「人間(人の間)」やルース・ベネディクトの「恥の文化」を参考に、これを「恥の意識」と関係づけて論じている<sup>24</sup>。このように、榎本の一連の著書は、日本人の特徴を西欧の伝統や文化を用いて相対化しているという点では参考とすべき見解が幾つかあるが、「世間体」に関しては若干の疑問を残す<sup>25</sup>。私見では、「世間体」は目上・目下関係だけでなく、同質関係(目線)にも存在し、むしろ同質関係(目線)にこそ、「世間体」の実態が色濃く反映されると考えている。従って次章では、前稿での私見も交えながら「世間体」について論じることとする。

## 第2章 「世間」と「世間体」

### 第1節 「世間体」の構造についてー

「世間体」については、社会心理学者の井上忠司による労作<sup>26</sup>があり、これは阿部が「世間論」を展開した1990年代後半より前ー1977年ーに著されている。この著書は、タイトルにもあるように、「世間体」の“構造”について論じたものであり、同書の「学術文庫あとがきー補遺にかえてー」で阿部の「世間論」にも言及している<sup>27</sup>。そこでは、「世間体」を「「世間」に準拠して体面・体裁をつくろい、恥ずかしくない行動をしようとする規範意識」(波線は筆者)と再定義し<sup>28</sup>、阿部の「世間論」については、「”理念型“の「世間」の構造モデルは、今日でも依然として有効性を失っていないようにおもわれる」とした上で、「世間」は、一種の準拠集団であって、同心円的に重層化した構造をなしている。すなわち、自分のがわからいえば、いちばん内がわの近い存在が「ミウチ」または「ナカマウチ」であり、いちばん外がわの遠い存在は、「アカのタニン」または「ヨソのヒト」である。両者の中間帯にあって、「世間体」にこだわるなど、人びとの行動のよりどころとなるのが「セケン」にほかならない。」<sup>29</sup>と論じている<sup>30</sup>。

「世間体」に関しては、大正期に出現した「新中間層」を対象に国民の「生活意識の向上」をキーワードにして考察を試みたことがある<sup>31</sup>。要約すると、大正期は、経済発展に伴う国民の生活水準の向上、そして都市化に伴う共同体意識の希薄化という日本近代の歴史の流れの中で、それまでの「古い世間並」から「新しい世間並」ー国民の「生活意識の向上」により、周囲の動向や空気に常に目を配り、体面や体裁を繕う「世間」、すなわち「世間体」ーへと移行する時期であり、昭和初期の軍国主義の出現からアジア・太平洋戦争の敗戦まで一旦は停滞するものの、戦後の高度経済成長期に再浮上してきたと結論付けた。そして「一億総中流」という言葉が象徴的に示すように、戦後の高度経済成長期以降の「世間」は、大正期の「新しい世間(＝世間体)」が拡大したものであると見做している。

その上で、井上が明らかにした同心円的に重層化した構造における「世間体」について言及すると、現代の日本社会では、個人化・個別化、人間関係の希薄化が進んだ結果、「ミウチ」「ナカマウチ」の範囲が狭くなることで、逆に「アカのタニン」「ヨソのヒト」の範囲が広がる。そして、その中で「世間体」は狭くなった「ミウチ」や「セケン」の中で機能する、という構図が想定できるが<sup>32</sup>、私見では、テレビを媒介とした「大きな世間」の登場と浸透によって依然として「世間体」は広い範囲で残存すると考えている。従って「アカのタニン」や「ヨソのヒト」の範囲が広がることに伴い、「世間体」が機能しなくなり、「世間体の原理」が形骸化していったという先の榎本の主張については、これを規範意識という一面しか見ておらず、「生活意識の向上」と「生活水準の維持」いう視点が抜け落ちていることから、これを疑問とせざるを得ない。

以上、「世間体」について、前稿を踏まえて問題点を指摘した。最後に、井上の次の指摘を取り上げる。「一方では、交通・通信(最近ではIT関連の)技術や、マス・メディアの驚異的発達によって「セケン」は拡大した」と言い、「同時に他方で、「セケン」が「ミウチ」ないし「ナカマウチ」への領域へと浸透し、両者の境界があいまい化していることも、指摘しておかなければならない」<sup>33</sup>と。これは要するに、「セケン」には「二つの顔」ー両義性ーが存在すると解釈でき<sup>34</sup>、両義性という点については肯定的に受け止めているが、マス・メディアの驚異的な発達によって「セケンが拡大した」という点については、疑問が残る。この点に関して、テレビの影響による「大きな世間」が出現し、それが複数の「小さな世間」に覆い被さることで徐々に「大きな世間」が「小さな世間」に浸透していった



というイメージもっており、その具体については次章で論じる。因みに、テレビの影響力の衰退と歩調を合わせるように出現した IT 社会の到来によって「大きな世間」が「小さな世間」に細分化されるという過程を辿るが、その「小さな世間」は最早、伝統的な「世間」ではない。これが現代の日本社会と「世間」との関係の新しい局面であると見通しているが、次稿で論じる予定である。

## 第2節 伝統的「世間」と「世間体」について

現代の日本社会における「世間」について、法学者の佐藤直樹は「世間」の復活を、社会学者の今枝法之は伝統的な「世間」の溶解を指摘している<sup>35</sup>。そして、その根拠として、佐藤は阿部の「世間論」を肯定的に受け止めているのに対して、今枝は、基本的には井上の見解を肯定的に受け止め、阿部「世間論」の問題点を指摘する。とりわけ今枝は、阿部が先行研究である井上の業績を十分に検証せずに論を展開した結果、①井上が明らかにした同心円的重層性を把握しなかったがために、「世間」だけが個人を縛る、といった世間一元論になっている、②日本の前近代的な共同体の人間関係を「世間」としてのみ掌握し、「イエ」「ムラ」「ウチ」といった共同体の内集団の存在をほとんど顧みなかったがゆえに、「世間」概念をより厳密に規定できなかった、の2点を鋭く指摘している<sup>36</sup>。また、氏は、比較行動学者の正高信男が掲げた、現代社会の特徴を表す「IT 世間」についても同様の指摘をしている<sup>37</sup>。今枝が井上の業績を肯定的に受け止めている点や「世間」の変容を認める点については、基本的に同じ立場であるが、若干、見解を異にする部分もあり、次章で改めて取り上げたい。

さて、ここで、そもそも「世間体」が何故、存在するのかについて論じておきたい。「世間体」を規範意識という一面のみで捉えることには疑問が残ることは先に記した通りであるが、これは「場」を示す「世間」には（暗黙の）ルールが存在することを前提として議論が進められており、人々の“意識”（本稿では生活意識）という点から「世間体」を捉えるという視点が疎かになっていったと思われる。そこで本稿では、規範意識以外に、「世間」に所属する者同志が互いに同質である（でありたい）ことを示す対面・体裁—生活意識や生活水準への拘り—もあるという立場を採る。そして、その上で想起したいのが第1章で紹介した「承認欲求」である。

前稿で、「新しい世間」は、生活意識の向上とそれを維持しようと周囲を気にするようになる心情—「世間体」—を伴うものであることであると論じたが、その「世間体」の深層には、自らが所属する集団の人々と同質でありたい、そのために他者から、ないし所属集団から承認されたいという欲求が働き、特に現代の日本社会ではその欲求が一層、強くなってきているのではないかと推察する。すなわち、井上が指摘したセケンの両義性という性格の中で、「世間」の範囲が狭くなってきたことにより「承認する主体」が狭くなることで信頼に対する不安が生じた。加えて、もう一方の「承認する主体」であったテレビ—テレビは狭いセケンの「承認」の信頼性も担保する—の影響力と信頼性が衰退していくことで、2つの「世間」からの承認が絶対的なものではなくなっており、格差社会の顕在化によってそれまで均質であると思い込んできた日本人の意識に変化が生じてきたために、“真”の「承認の主体」を求めると意識が強くなってきたのではないだろうか、と推察するのである。このような「承認のダブルスタンダード」が自己のアイデンティティに対する不安を煽り、ここに現代の日本社会と「世間」との心理的関係—息苦しさや生きづらさ、閉塞感など—を見出すことができると現段階では考えている。

### 第3章 メディア社会と戦後の「世間」

#### 第1節 テレビと「世間」について

戦後の日本社会において、テレビは日本人の生活に多大なる影響を与えた。社会心理学者の橋元良明は、テレビが日本人の生活習慣に及ぼした影響は甚大であるとし、「我々は国内のみならず世界の出来事に関する情報の多くをテレビから得、また消費生活のための様々な知識をテレビ CM を通じて獲得している。日常的な会話も、その多くの部分、テレビから得られた情報を共通の背景的知識とすることで成り立っている。」<sup>38</sup>とまとめた上で、「その意味でテレビは日本人の情報環境の均質化を促進した」<sup>39</sup>とテレビの歴史的役割について論じている。

テレビが日本社会に普及するきっかけとなったのは戦後の「街頭テレビ」であるが、1955年以降、次々に民報が開局し、当時の皇太子御成婚パレードの生中継が普及の引き金となって全国的に所有者が拡大していった。それまで高額であったテレビの価格が大幅に下がったことでテレビが購入しやすくなった面もあるが、本稿の問題関心からすると、むしろ、「他人と違うことを誇るというよりは、流行や周囲の変化に」乗り遅れない“ことの方が重要であった”という NHK 放送文化研究所の指摘<sup>40</sup>が興味深い。ここに国民の生活意識の向上に伴う新しい世間―「世間体」―が窺えるのである。

ここで、開局当時のテレビ番組の方針と編成に目を向けてみたい。編成については、「報道並びに社会関係番組」「スポーツ番組」「音楽・娯楽関係番組」の3つに大別され、それらに基づいたテレビ編成は、当初は「アメリカからの輸入番組」「ラジオ人気番組のテレビ化」「教育・教養番組」であった<sup>41</sup>。それらの特徴づけるならば、それまでのメディアの中心であったラジオを引き継ぎ、報道は言うに及ばず、アメリカの民主主義の魅力や豊かな生活、スポーツ中継等を通して”リアル“を視覚化したものがテレビであるということになる。また、「教育・教養番組」に関して、「テレビの急速な発展が、放送局間の激しい競争と一部番組の低俗化を招き、評論家の大宅壮一の「テレビ一億総白痴化」批判も登場するなど、テレビを教育のために活用すべきとする世論が強まるという社会的状況が存在した。」という背景があった記載されている<sup>42</sup>。社会学者の佐藤卓己は、大宅の「一億総白痴化」批判は、むしろ「一億総博知化」の国策に取り込まれ、日本独自の教育テレビ体制を誕生させる呼び水となった、と論じているが<sup>43</sup>、これは台頭してきたテレビが報道や音楽、娯楽を映し出すものとしてだけではなく、明治・大正期から脈々と続く学歴主義や教養主義の流れの中で、「教育・教養番組」がテレビに対する日本国民の信用の裏付けとなったと言える。ともあれ、ここに日本人がテレビという当時のニュー・メディアに惹き込まれていくに従って日本人が均質化していく過程を読み取ることができるのである。その意味で、「テレビが家にやってきた」という表現は、戦後の日本人とテレビとの関係を象徴的に表していると言ってよい<sup>44</sup>。

このように、テレビの普及は、戦後の日本社会が戦前の経済水準を取り戻し、そこから経済発展へと進む中で日本国民の生活意識が向上し、その意識や水準を維持しようとすべく体面や体裁への拘りを強める役割を担ったという意味では、テレビが「世間体」を後押ししたと考えられなくもない。また、家庭の一家団欒を演出する役割を果たしたテレビが、やがて個人が自由に所有するようになったことで徐々にその役割が弱くなり、テレビが担ってきた日本人の均質化という役割も次第に弱くなってきた点も見逃すことができない。そして、それは IT 社会の出現と無関係ではあるまい。

次に、現代社会におけるテレビと「世間」との関係について考察したい。社会学者の太



田省一は、その著書でテレビと「世間」や「空気」を結び付けて考察しており<sup>45</sup>、興味深い。氏は、テレビの爆発的な普及を「新しい世間の誕生」と位置づけ、その特徴を阿部の「世間論」との比較を通して「テレビ的世間」と定義している<sup>46</sup>。その定義について、テレビは視聴するという行為なので「世間」のような「場」の意識を考慮する必要がなく、その意味では、「新しい世間」と言えるであろう。当然、太田は、阿部の「世間論」にある伝統的な「世間」がそのまま温存したという立場を取ってはいない。

太田は、「テレビ的世間」の特徴として、「大きさ」と「ユルさ」の2点を挙げている<sup>47</sup>。

「大きさ」については、本来、狭い生活圏の中に存在していた「世間」が、テレビの影響力と素人参加番組の“素人の面白さを引き出す”という番組戦略が功を奏してテレビがより身近になったことで日本全体を巻き込む巨大なものとなってしまった、と氏の見解をまとめることができる<sup>48</sup>。そしてこの見解は、交通・通信技術やマス・メディアの驚異的な発達によって「セケン」が拡大し、「ミウチ」や「ナカマウチ」との境界があいまいになってしまったという井上とほぼ同じである。要するに、それまでの「(小さな)世間」が「大きな世間」に拡大したという見解であるが、この点については後述する。

「ユルさ」については、以下のように説明する。「周りの他人とのしがらみで集団のなかにがんじがらめになるのではなく、個人の存在も容認する”余白”がある。「戦後自由にものをいえる社会」になったが故の自己表現も可能な世間だ。それは、同調への圧力と自己表現とが互いに中和しあえるような、いかにも「戦後的な世間」であった。」<sup>49</sup>と。この「ユルさ」に注目したい。

個人の存在も容認するという太田の指摘は、阿部の「世間には「個人」がない」という主張<sup>50</sup>と一見、相反するものである。「テレビ的世間」は視聴という行為で成り立つので、集団という“場”の中に雁字搦めにならず、その行為自体に体面や体裁は必要ない。故に、「世間体」を気にせず、個人として自由に振る舞ったり発言したりすることが可能である。従来の「世間」研究では、「世間」という“場”を前提とした見解が多いが、「テレビ的世間」は“場”を考慮する必要がなく、テレビから流れる視聴覚のみで構成される一方向の「世間」である。そこには直接的な情緒的繋がりや他者からの”まなざし“は存在しないが、その一方で、テレビの視聴によってもたらされる影響力は、それが同質性を伴う「大きな世間」であるだけに、視聴する者に対して生活意識の向上や生活水準の維持を伴う「世間体」に縛られるような構造を強いる。要するに、テレビは、井上の論じた両義性を飛躍するならば、すなわち、一方で「個人」ということを意識させるが、もう一方で「集団」(＝「世間体」)を意識させるという存在なのである。この点について、同調圧力を参考にして私見を記す。

先の橋元によるテレビの影響による日本人の均質化は、一方で、異質なものがより鮮明に浮かび上がるという特徴を併せ持つ。これは、それまで各人が各々に所属した“場”を特徴とした「小さな世間」に視聴覚を特徴とした「大きな世間」が覆い被さったことで、ほとんどの日本人の異質なものに対する認識も次第に共通解を持つようになることと考えることが可能である。ここにテレビを介した「大きな世間」の秩序－国民が共通した倫理性を帯びると同時に美的秩序となる傾向をもつ人工的秩序－が形成される<sup>51</sup>。加えて、共通解を持つことで異質なものに対して過剰に反応するようになり、そこから排除が生まれる。先に、同調圧力と排除に関する片田の見解を紹介したが、同調圧力の背景にメディア(テレビ)の影響による排除の共通解が存在することで、排除されることへの恐怖感が伴い、その影響は、「大きな世間」が秩序化されているが故に、それを是として、やがて「小さな世間」にまで浸透するのであって、「小さな世間」が「大きな世間」に拡大したという太田、井上の見解では、日本人の均質化と排除の関係をうまく説明できない。拠って、本稿では、戦後の「世間」は、“場”を伴う多くの「小さな世間」に、影響力の強い“場”を伴わない

「大きな世間」が覆い被さった二重構造であると理解したい。

再び、太田の見解に論を戻す。この「大きい世間」と「ユルい世間」を背景にした「テレビ的世間」の完成型が一億総中流意識を基盤とする「内輪ウケ社会」である、と太田は言う<sup>52</sup>。「内輪ウケ社会」とは、テレビの中の芸人だけではなく、視聴者を含めすべてが内輪にある状態であることを意味するが、この社会もバブル崩壊後の格差意識の顕在化によって内輪の意識が綻び始めることにより、「テレビ的世間」もその影響を失いつつあり崩壊に向かっているのが現代の日本社会の状況であると論じている<sup>53</sup>。この指摘は、それまで日本人の均質化の役割を果たしてきたテレビが、バブル崩壊後の格差社会の顕在化や“やらせ番組”等の不祥事で、その信頼が衰えてきたことを意味する。そして、それは、学校教育や職場で集団性や同質性を意識させられてきた日本人にとって、それらを担保する保証が衰えてきたという意味で、不安を煽るものとなったと考えることができる。

また、太田は、別著で「ユルさ」について、日本社会の変化という歴史的な流れの中で具体的に記している<sup>54</sup>。まとめると、1970年代に始まり「日常」を映し出してきた「テレビ＝社会」の図式が、2000年代に競争原理を是とするような序列意識がさまざまな形で割り込んでくるようになったことで崩れ、テレビと社会との一体感がリアリティを失ってしまった。その後にテレビに映し出されたのが「格差社会」であるが、それは”失われた日常“であって、「格差社会」をなぞっているに過ぎなかった。そして、改めて発見されるべきテレビ主導の「日常」を表すキーワードとして、太田は「ユルさ」という表現を持ち出したのである。この「ユルさ」とは、“掛け値なしの日常”を映し出すことであり、「ユルい」ことが「ガチ」であることを保証する。すなわち、「芸人も「素人」もなく、そこにいるすべての人々がなにも特別なことが起こらない日常の空気にただ浸った状態がもたらす心地よさの感覚」である<sup>55</sup>。それは、「格差社会」以降の日本社会の閉塞感や息苦しさを癒すオアシスのような役割があると同時に、テレビという「大きな世間」が維持してきた影響力が徐々に影を潜めつつあることを示唆している。

最後に、太田は、テレビの爆発的な普及の背景に「総中流意識」の高まりがあると見ており、それを「横並び意識」と言い換えている<sup>56</sup>。先にテレビの普及の背景に関するNHK放送文化研究所の説明を引用したが、この説明と「総中流意識」が「横並び意識」であるということを勘案すると、先に指摘したように「世間体」には「横並び意識」が存在すると言える。先に、榎本の「世間体」に関する捉え方に対して疑問を呈したが、テレビの影響力を考慮すると、「世間体」は、目上・目下の関係よりも同質意識（目線）、すなわち「横並び意識」の方が強いと言えるのではないだろうか。

## 第2節 「世間」の流動化と「空気」について

太田と同様に、メディアの分野から「世間論」を言及したのが、第1章で紹介した鴻上尚史である。氏は、阿部の「世間論」を参考に、その著書で「「空気」とは「世間」が流動化したもの」と主張したことは先に確認した通りであり、前出、片田や佐藤が阿部の「世間論」を一步進めたものとして評価している。

鴻上は、最初に、「空気を読む」ということについて、一つは、大物司会者が存在するお笑い番組と司会者が存在しない学校という2つの場面を設定して比較を行う。そして、学校のような司会者がいないところでは空気は混乱するので「読めない」とし、大物司会者が存在するようなお笑い番組では、その空気を決めるのは大物司会者であるので、「読まなければならない」とする。そして、「世間」は「空気」が流動化しているものであると考えた鴻上は、「世間」と「空気」を共に内側から支え、構成しているルールは同じであるということを前提として阿部の「世間」の3つの構成原理について言及するのである。「空気」

の原因を検証する過程の中で「世間」の存在に辿り着いたというのが本著の特徴である。さて、阿部の3つの構成原理について、これらの要素は、別の表現をすると、いずれも自身が所属する集団内での“つながり”に通じるものであると捉えることが可能である。従って、本稿では、それらの構成原理を逐一、検証する方法は採らず、NHK 放送文化研究所がまとめた調査結果<sup>57</sup>を参考にして考察する。

この著書には、「人間関係」という項目があり、そこには「あっさりとした人間関係を望む人がさらに増加」<sup>58</sup>とある。調査では、人間関係について、ア) 親せき、イ) 隣近所、ウ) 職場、エ) 友人の4つの場が設定されており、それぞれに<形式的つきあい><部分的つきあい><全面的つきあい>の3つの選択肢があり、調査の結果を総体的に記したのが先の表現である。具体的に見ていくと、ア) について、1970年代は<全面的つきあい>を望む人が過半数でもっとも多かったが、1983年を境に<部分的つきあい>を望む人が多くなり、<全面的つきあい>は減少傾向にある。イ) については、<部分的つきあい>がほぼ半数を占め、2003年には<形式的つきあい>が<全面的つきあい>を逆転し、その差は開いている。ウ) については、2008年以降、<全面的つきあい>が<部分的つきあい>をやや上回っており、特に、ここ10年は<全面的つきあい>が僅かに復活した感がある。エ) については、<部分的つきあい>が最も多く、次いで<全面的つきあい><形式的つきあい>の順になっており、これは10年間で変わっていない。そして、これらの分析結果として「核家族化に伴って親戚づきあいが減り、地域の中で相互扶助がみられなくなってきたこと、職場でも、仕事以外のつきあいを求めなくなってきたことが影響していると考えられる。」<sup>59</sup>としている。また、「仕事と余暇の在り方」について、「仕事志向」型が大きく減少し、「仕事・余暇両立」型が若年層、中年層で増え、全体でも30%を超えている。そして、これらの4つの立場に共通しているのは、<全面的つきあい>が減り、<形式的つきあい>を選ぶ人が増えた点であるとしている<sup>60</sup>。また、調査結果の推移を見ると、エ)を除く3つの場でそれぞれ30%近くを占めるようになり、1973年の調査開始から見ると、ほぼ3倍である。

この分析結果は、「あっさりとした人間関係」という現代日本人の意識傾向が阿部の「世間」の3つ構成原理が現代の日本社会に当てはまらなくなってきたことを説明していると考えられる。しかしながら、この調査結果には留意が必要で、「実際にどのようにしているのかは別にして」とあり、このことから、むしろ現状は調査結果と逆、すなわち<全面的つきあい>が現実として存在しているのではないかということを想起させるが、この点については、例えば、イ) については、阿部も晩年、「長幼の序」が次第に崩れてきていると指摘している<sup>61</sup>ことや職場の先輩社員の飲みの誘いを断る若手社員が多くなってきたことなどが傍証となる。先に、ウ) について、<全面的つきあい>が<部分的つきあい>をやや上回ったことを見たが、その一方で、「仕事・余暇両立型」が若年層、中年層で増えているという先の調査結果もあり、このことは、世代交代が進むに従って次第に<形式的つきあい>に推移していく可能性を想起させる。一方で、後輩社員が先輩社員に敬語を用いることで、これを長幼の序の表れであると思倣す主張もあるが、この点に関してはコミュニケーションの育成という観点から論じたい。

社会人・企業人教育の一環として、マナー指導や敬語の指導が取り入れられている、社会（「世間」）に巣立つ学生を対象にしたこのような指導は、一見、「世間」が残存しているかのように見える。前出、片田も指摘したことであるが、産業構造が第二次産業から第三次産業に徐々に移行するに従ってサービス業－感情労働－が多くを占めるようになり<sup>62</sup>、その影響でマナーや敬語等に対してより敏感になったと考えられる。しかしながら、そこには客をもてなすというよりもマニュアル通りに進めていくことで完結するという形の接客方法が多くなってきたという傾向が窺える。社会学者のA.L.ホックシールドは、その著

書で、感情を“管理“することについて、企業の管理部門によって感情規制や感情管理のマニュアルが作成され、それに従って業務を推進するように求められるので、労働者個人が自身で感情労働を制御できにくくなっていると指摘する<sup>63</sup>が、このことから、感情管理の一環として企業研修等で敬語が、“敬う“という本来の意味よりもコミュニケーション・ツールとしての意味しかないと考えられる。言語学者の石黒圭は、社会言語学を「ふさわしさ」の言語学であるとし、話し手の世代や性別、話し手と聞き手の関係、その場の状況などによって「ふさわしさ」は変わってくると論じているが<sup>64</sup>、人間関係の希薄化やIT社会の到来によって“場“を共有する機会が少なくなってきた今日の日本社会の状況を鑑みれば、“場“を共有することによって敬語の本来の意義を身をもって体験する機会が少なくなってきたと言え、そのような背景があるからこそ、敬語を社会人教育の一環として取り入れる必要性もまた、生じてくるのである。

翻って、「生活全体の満足感」について、国民の実に9割超が「満足」と答えている。この点について、内閣府が2018年に実施した「国民生活に関する世論調査」によると、「物質的にはある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活することに重きを置きたい」と答えた人が61%であったという。ここに至って阿部の「世間」の3つの構成原理が成立する余地は低いと考えられるのである。しかしながら、その一方で、「空気」に対する脅威や恐怖、それに伴う閉塞感や息苦しさを現代の日本人は感じているのであって、その意味では、中途半端に壊れた「世間」、それに取って代わった新しい「世間」が「空気」であると見越す鴻上の主張を改めて考察しなければならない。

## おわりに

以上、現代の日本社会と「世間」との関係について、「生活意識の向上」と「生活水準の維持」をキーワードとして、近年の論考や著作を参考にしながら、伝統的な「世間」が時代とともに変質したということに適時、論じてきた。

考察の結果を端的に記すならば、テレビ社会の出現によって、テレビという「大きな世間」が従来の“場“を伴う「小さい世間」に覆い被さるような形で「新しい世間」が創出されたと結論付けた。この「大きな世間」は、テレビの発信するさまざまな情報によって日本人全体が均質化した「世間」であり、多大な影響力を伴った「テレビ的世間」は当然、「小さな世間」にまで浸透する。その影響とは生活意識や生活水準に裏付けされた「世間体」を伴うものであっただけに簡単に逃れることができない。また、「大きな世間」の持つ均質性から逸脱したものに対しては排除の論理が伴う。その一方で、日本人の個人化や人間関係の希薄化は、「小さな世間」を徐々に衰退させる。「大きな世間」についても、テレビへの不信感やIT社会の出現によって、「承認」をする主体としての信頼度が衰える。そして、その後に登場するのは、「承認欲求」を満たすことに重点が置かれ、かつ日本人が“自らの意思で選択”する、新しい局面を迎えた「世間」なのである。

## 註

- 1 阿部の「世間論」については、本稿で考察を進める中で適時、触れるので、逐一、取り上げることはしない。前稿参照のこと。(本稿、註2)
- 2 「『世間論』再考—大正期と「世間」—」『北陸大学紀要』第49号、2020年9月。
- 3 因みに、中村陽吉著『世間心理学ことはじめ』（東京大学出版会、2011年8月）について、本著は、個人と他者との心理的交流について論じられたものであり、興味深い

が、「世間」について直接、論じられたものではないので、本稿では触れない。

- 4 『付度社会ニッポン』角川 K-176 2017 年 11 月。
- 5 片田（註 5）第 2 章を参照のこと。
- 6 片田（註 5）91 頁。尚、片田は、このような傾向にある人はアイデンティティ・クライシスに陥る危険性があることを指摘している。
- 7 片田（註 5）105 頁。
- 8 片田（註 5）112 頁。
- 9 片田（註 5）141～154 頁。
- 10 『空気と世間』講談社現代新書 2006 2009 年 7 月。尚、鴻上は、阿部の「世間」を構成する 3 つの原理に「神秘性」と「排他性」の 2 つを加えているが、本稿では、阿部の「世間論」の考察を目的とすることから、鴻上の 2 つの構成原理には言及しない。
- 11 鴻上（註 11）94～97 頁。
- 12 鴻上（註 11）第 5 章。因みに片田自身は、その背景をバブル崩壊後に求めている。
- 13 片田（註 5）161 頁。
- 14 『付度の構造』イースト新書 094 2017 年 12 月。
- 15 榎本（註 15）123 頁。
- 16 榎本（註 15）65 頁。
- 17 『シリーズ人間の発達 12 日本人のしつけと教育－発達の日米比較にもとづいて－』東京大学出版会 1994 年 10 月。
- 18 榎本（註 15）111 頁。
- 19 榎本（註 15）69～73 頁。
- 20 榎本（註 15）150 頁。
- 21 ①『「みっともない」と日本人』日経プレミアムシリーズ 313 2016 年 7 月。②『上から目線の構造』日経プレミアムシリーズ 139 2011 年 10 月。
- 22 榎本（註 22）②。182～184 頁。
- 23 榎本（註 22）②190 頁。
- 24 榎本（註 22）①。132～142 頁。
- 25 榎本は、この点について、「『世間の目』を内面化することで醸成された美意識のようなものが、私たちの中で強く働いているのではないだろうか。」と記しているが（註 21 ①）、後に述べるように、人間関係が希薄化することで「世間」の範囲が小さくなった現代社会で、「世間の目」の内面化に従来のような効果が期待できるかは疑問である。
- 26 『世間体の構造－社会心理学への試み－』講談社学術文庫 1852 2007 年 12 月。尚、原著は 1977 年に日本放送出版協会より刊行された。
- 27 井上（註 27）264～266 頁。
- 28 井上（註 27）267 頁。
- 29 井上（註 27）266 頁。因みに、阿部は、『「世間」とは何か』（講談社現代新書 1262 1995 年 7 月）で井上の著書を参考文献として挙げているが、具体的に論じてはいない。
- 30 以下、本稿では便宜上、井上が論じた「世間」を「セケン」と表記する。
- 31 註 2 を参照のこと。
- 32 この点について、社会心理学者の菅原健介は、「せまいセケンの乱立」（人々はそれぞれの趣味や都合に合った人間関係を模索し始めており、そのことによって生じるセケン）と表現しているが、『羞恥心はどこへ消えた？』光文社新書 230 2005 年 11 月。）この主張は、テレビの影響が衰退した後の「世間」を考察する上で興味深い。
- 33 井上（註 27）267 頁。
- 34 因みに、井上の著書では、「ひろい世間」と「せまい世間」を対置させている。



- 35 ①佐藤については、近著では『同調圧力ー日本社会はなぜ息苦しいのかー』（鴻上尚史との共著）講談社現代新書 2579 2020 年 8 月。33 頁。②今枝については、「第六章 現代化する「世間」ー脱伝統化・個人化・情縁化する「世間」ー」『現代化する社会』晃洋書房 2014 年 7 月、を参照のこと。
- 36 今枝（註 35②）148～149 頁。
- 37 今枝（註 35②）162 頁。
- 38 『メディアと日本人ー変わりゆく日常ー』岩波新書 1298 2011 年 3 月。34 頁。
- 39 橋元（註 38）34 頁。
- 40 『テレビ視聴の 50 年』（NHK 放送文化研究所編）NHK 出版 2003 年 11 月。31～32 頁。
- 41 註 40 著書 「第 1 章 速やかな普及のための編成戦略」を参照のこと。
- 42 註 40 著書。23～25 頁。
- 43 『テレビの教養ー億層博知化への系譜ー』NTT 出版 2008 年 5 月。19 頁。
- 44 吉見俊哉著『親米と反米ー戦後日本の政治的無意識ー』岩波新書 1069 2007 年 4 月。173 頁。尚、この表現は、「大きな世間」が個々の家庭に“やってきた”と言い換えることもできる。その意味では、後述する太田省一の「テレビ的世間」という表現は首肯できると思われる。因みに、吉見は、戦後日本の中にアメリカがメディア化、イメージ化されることで、逆に、日常意識とアイデンティティを内側から強力に推進していく超越的な審級となっていく、と論じている。（同著、16 頁）
- 45 『最強芸人社会ニッポン』朝日新書 575 2016 年 8 月。
- 46 太田（註 45）156 頁。
- 47 太田（註 45）157～159 頁。
- 48 太田（註 45）「第 2 章」「第 4 章」を参照のこと。尚、井上もメディアの影響を指摘しているが具体的な考察はなされていない。
- 49 太田（註 45）157 頁。
- 50 『近代化と世間ー私が見たヨーロッパと日本ー』朝日文庫 2014 年 11 月。85 頁。
- 51 成沢光著『現代日本の社会秩序ー歴史的起源を求めてー』岩波書店 1997 年 11 月。92～94 頁。成沢は、人工性の秩序を自然性（いわゆる伝統的「世間」）と対比して表現している。
- 52 太田（註 45）161～163 頁。
- 53 太田（註 45）164～175 頁。
- 54 太田省一著『テレビ社会ニッポンー自作自演と視聴者ー』せりか書房 2019 年 1 月。200～202 頁。
- 55 太田（註 54）202 頁。
- 56 太田（註 45）154 頁。
- 57 『現代日本人の意識構造』（第九版）NHK 放送文化研究所 2020 年 2 月。
- 58 註 57 189 頁。
- 59 註 57 192 頁。
- 60 註 57 192 頁。
- 61 阿部（註 50）97 頁。
- 62 片田（註 5）169 頁。
- 63 『管理される心ー感情が商品になるときー』（石川准・室伏亜希共訳）世界思想社 2000 年 4 月。「第 6 章」を参照のこと。
- 64 『日本語は「空気」が決めるー社会言語学入門ー』光文社新書 643 2013 年 5 月。16 頁。